大會抄錄

平民教育運動における晏陽初と陶行知

小林善文

一九二三年、中國における文盲成人の解消をめざして中華平民教育促進會總會が發足した。この組織の中で指導的役割をはたしたのが晏陽初と陶行知である。彼らの盡力によって平民教育運動は全國に擴大し、テキストである『平民千字課』の發行部數は三六〇萬部にも達した。だが、無償の識字教育として出發した平民教育運動は、運動推進母體の財政難・教員や受講生をとりまく生活の苦しさ・平民教育理論の魅力の乏しさ等々の要因のために行きづまりを見せてくる。この窮境を打開すべく晏陽初は、識字教育を中心とした從來の方針の上に生計教育や公民教育の要素を加えた新たな平民教育の普及をめざした。そして、農村に注目した晏は、洋行歸りの知識人を動員して河北省定縣に入り、總合的な鄉村改造實驗を行ない、その一環として平民教育を推進した。一方、晏と協力して平民教育を進めていた陶行知は、やがて運動方針をめぐって晏と對立し、獨自の平民教育理論の實踐をはかることになる。陶は中華教育改進社の援助の下に南京郊外に曉莊試驗鄉村師範を設立し、指導員や兒童と苦樂を分かち合いながら鄉村における教員養成と教育普及をはかっていった。五四時期に生まれた平民教育運動は、さまざまな形で實踐されたが、そのうち國民革命期に至るまで繼承されたのは晏と陶の運動であった。そこで彼らの理論と實踐の異同を探ることを通して、平民教育運動の實態と本質を明らかにしていきたい。

高句麗長安城問題再考

田中俊明

高句麗は、廣開土王期の領域擴大を經て、次王長壽王の一五年（四二七）に、その都を鴨綠江北岸の丸都城（國內城）から、大同江北岸の平壤城に遷し、新羅・百濟への壓迫を強めることになる。この當時の平壤城は、しかしながら、現在の平壤（ピョンヤン）市街ではなく、その東北數kmにある大城山城とその一帶であり、現在の平壤市街に遷都されるのは、六世紀後半のことである。ともに平壤地域にあり、同じく平壤城と呼稱されるが、時間的な前後關係をもっていえば、前期平壤城・後期平壤城という形で區別できる。そして後者はまた、長安城とも表記されるのである。卽ち、ここにいう長安城とは、六世紀後半以降、滅亡までの王都であった、後期平壤城を指す。

この長安城については、遷都の事實そのものを否定する見解もあるため、まずその點から再考する必要がある。そして遷都が存在したことを確認したうえで、城壁石刻など限られた史料を通して、あらためて築城過程・規模を考察し、あわせて遷都するに至った背景および遷都の意義を追究したい。この問題については既に、現在そ

の地を首都とする朝鮮民主主義人民共和國において『高句麗平壤城』という體系的な研究も刊行されているが、少なからず問題があり、再考の餘地は充分あるのである。

本報告ではさらに、東アジア都城史における位置づけと、高句麗國家史の展開における長安城時代の設定に對する見通しにも、ふれてみたい。

「包公」傳說の演變

木田知生

北宋時代の實在人物包拯（九九九―一〇六二）は、生前、仁宗の嘉祐元年から同三年まで國都開封府の長官を勤めた。その間のすぐれた行政手腕とその前後の地方官及び中央官僚歷任中の仕事ぶりは、同時代人にも影響を與え、幾つかのエピソードを殘す結果となった。その事蹟の數々は、宋代の基本史料といえる『續資治通鑑長編』等の諸史料に窺える。また、死後しばらくすると、今度は、その包拯が話本・雜劇の主人公として、文藝作品の中に登場し、その時々の時代精神のなにがしかを象徵・反映する存在として、人々に記憶されることになった。この度の發表では、近來新たに發見された『明成化刊本說唱詞話』と、小說集『龍圖公案』等を材料に、元雜劇からあとの「包公」像を、その歷史背景とともに明らかにしてみたい。

隋代の府兵制について

氣賀澤保規

隋の文帝は、全土の再統一に成功した翌開皇十年（五九〇）、兵士の軍籍から民籍への移行、舊北齊地域一帶に配置した軍府の廢止の兵制改革を實行したが、これは、兵民一致制の確立と軍府の關中方面への集中を促し、唐の府兵制の起點になったとして、府兵制史上とくに大きな意味をもつものであったとみなされてきた。

しかしながら、そのときの詔敕の內容を、當時の狀況、兵士や軍府の位置、それらにたいする國家の對應等にも目を向けて捉え返してみるとき、果して府兵制のあり方を一變せしめるほどの意味をもつものであったか疑問になってくる。そもそも西魏以來の府兵制が、鄕兵の結集という形をとって、下からのエネルギーをくみ上げるなかで成立發展してきたとすると、文帝にあっても、そうした形をとる兵力の結集の有效性現實性が認識されていてもよいはずである。とすれば、開皇十年における軍籍の民籍への統合も、兵士たちの本來の立場・役割には基本的に變りはなかった、とする方向で解することも可能になる。むしろ本格的な兵民一致の追求は、つぎの煬帝による總管府の全廢、軍府の增設、鷹揚府制の發足といった一連の政策のなかで考えられる必要がある。だがこの煬帝の試みも、結局は貫徹できず、逆に最後は驍果とよばれる募兵に賴らざるをえなかったことを忘れてはならない。

以上、本報告では、開皇十年の改革への疑問を一つの手がかりに